

ホロコースト生存者のトラウマの開示の 包括的理解の試み

小松 由美

【キーワード】 ホロコースト、被害者、トラウマ、開示、長期的影響

1. はじめに：ホロコースト研究と記憶

第二次世界大戦が終わって70年近くが経過し、ナチス時代に行われたユダヤ人絶滅政策「ホロコースト」を子供時代に生き延びた人々が高齢に達している。千葉(2008)は、ホロコースト研究において、政治としての記憶、文化としての記憶が主たる研究対象となったのは比較的最近のことで、「ホロコーストの記憶」に対する責任をだれがどのように果たしうるのかという問題が大きな争点になっているのは、当事者としてホロコーストを知る人々がホロコーストの記憶を「追悼の記憶」として獲得しなすことで、ホロコーストに内在する精神的、文化的遺産を継承しようとした意識の表れだと述べている。これは、ホロコーストの時代を生き抜いた被害者たちが高齢に達したと関連付けられるだろう。ウェレンキャンプ(1995)は、情動の開示の形式や様式の文化的差異、情動体験を開示する欲求や開示と健康の関連性への社会的・文化的変数の影響を、精神文化人類学的に検討している。本稿は、ホロコーストの被害者が高齢化した今、彼らのトラウマ体験の開示についてカレイドスコープ的考察を行うことでホロコースト研究の多元化に寄与することを望んで記すものである。

2. 社会制度や文化的背景とトラウマの開示

2013年5月、ドイツ政府は、ホロコースト生存者の支援を行う対独物的請求ユダヤ人会議(The Conference on Jewish Materials Claims Against Germany, 2013)との協議で、ホロコースト生存者のホームケアに2014年から2017年まで総額8億ユーロを拠出することに決めた。これは、同会議が、既にホームケアを提供している56,000人に加えて、世界には福祉サービスが必要な生存者が更に9万人いるというデータを提示し、高齢化する生存者たちへの支援を訴えたことによる。交渉では、子供時代にホロコーストを生き延びた者の特別なニーズについ

て認めるように強調され、同会議とドイツ政府は、子供時代にホロコーストを経験した者独特のトラウマや後年に現れる症状について話し合うことにした。

1952年のルクセンブルグ協定以降、ナチスによるユダヤ人の損害に対するドイツ連邦共和国による補償が始まり、1950年代に、ナチスの支配下で強制収容所に入れられた者の健康への被害、自由の剥奪、失われた就業機会などに対するドイツ連邦共和国による補償を意図した連邦補償法が立法・改正された。エプスタイン(1979)によると、ドイツ語の「賠償」という言葉自体が生存者たちを激怒させ、賠償金を受けても家族は元に戻らず自分達が受けた不法行為を正すこともできないと拒否する者もあったが、その他の人々は、健康に対する損害の補償を求めることにした。この補償を受けるには、ホロコーストの被害者であることを明かし、自分を悩ます身体的・精神的障害が戦争中に受けた虐待と関連すると証明するために健康診断を受け、自らの体験について話すこととなった。このためにホロコーストを逃れてアメリカに渡った生存者達を診察した医師によるホロコースト生存者の精神科領域の資料が残されている。

PTSD(心的外傷後ストレス障害)の概念や、トラウマティックな過去の記憶を物語的に意識に統合することで治療するナラティブ・セラピーは1980年以降に登場したもので、ホロコーストが終わった時代にはまだ存在しておらず、生存者たちが戻った日常は、現代とは価値観も精神医学や心理学のアプローチも異なる社会であった。1950年代にホロコースト生存者たちが診察を受け始めたときは、ホロコーストの影響が永続的な心理的・身体的変化を引き起こす可能性すら医学の教科書に記されていないが、心の中で抑えつけられた問題は10年もしてから症状に表れた。2013年の協議でドイツ政府に提示されたホームケアの必要性の増加は、被害者の高齢化によるものだけではなく、社会の精神医学や心理学のアプローチが変わり、心身の変化を開示する者が増えた可能性も考えられる。

ヒルバーグ(1979)は、ナチスがとったユダヤ人迫害政策には、それまでにキリスト教会がとってきた方策との共通点が見られると指摘している。強制収容所から開放されたとき、かつて住んでいた家や財産は非ユダヤ人である他人の所有に移っており、コミュニティーが崩壊していて、ユダヤ人生存者たちの多くは元の生活に戻ることができなかった。彼らは新たな生活基盤を築くこととなったが、1946年7月、ポーランド南部のキェルチェに家族や自宅を求めて帰ってきたユダヤ人150人を群集が襲い、42人のユダヤ人が死亡、50人が怪我を負う事件が起こった。この虐殺のニュースは東ヨーロッパのユダヤ人コミュニティーに「野

火のように」伝わり、ユダヤ人の移住に拍車がかかったという（バーレンbaum、1996）。ヒルズバーグが指摘するように歴史の中に繰り返された迫害の記憶があったとするならば、生存者たちがヨーロッパ開放直後にトラウマを開示することを妨げる要因となったのではないか。

3. 強制収容所を経験した者のトラウマ開示

トーマス・バーゲンソール（2009）は、1934年にポーランド人の父とドイツ人の母の間にチェコスロバキアで生まれ、10歳でアウシュビッツに送られた後に収容所内で両親と離されたが、開放まで収容所での生活を独りで生き延びた。父親は死亡したが、収容所を生き延びた母と再会し、アメリカに単身渡って進学し、国際人権法の専門家となった。自らが経験したことを埋もれさせてしまうのではなく、家族に、そして更に広く伝えることで過去と未来を繋げたいと思い、「A Lucky Child」という回想録を出版した。

バーゲンソールは、自分がホロコーストについての映画を見たり本を読んだりすることはできないのに、収容所で体験したことは感情的にならずに自由に書けるのが不思議だ、と書いている。彼の母親は、孫に乞われてホロコーストの体験を書こうとするたびに泣き出してしまい、いつも2～3ページで筆が止まってしまったが、バーゲンソール本人はそれほど過去から影響を受けていないという。彼は、600万という犠牲者数の膨大さがホロコーストから奪ってしまった人間の顔を、ひとりひとりが記憶を語ることで取り戻し、また、消滅してしまったヨーロッパのユダヤ社会の理解を深めることができると考え、高齢者の回想ではなく、ホロコーストを生きた当時の少年の目で語ることにしたと述べている。

バーゲンソールは、2013年9月に東京の国際文化会館で『幸運な子～ホロコーストの記憶が未来に投げかけるもの』と題して講演した際、聴衆からの質問を受け、次世代にホロコーストについて伝えるには話すことが一番良い伝え方だと答え、加害者と被害者が理解しあうためにできることとして、ドイツとイスラエルが協力してひとつの教科書を作った例を挙げた。これは、お互いの体験を語り合うプロセスがあってこそ可能になる作業である。

4. アイデンティティーを隠して生き延びた者のトラウマ開示

ホロコーストの生存者には、強制収容所から解放された者のほかに、ユダヤ人としてのアイデンティティーを隠して非ユダヤ人の中で生き延びた者もいる。ナ

チスがポーランドに侵攻した後の1940年にポーランドに生まれたフェリシア・グレーバー(2010)は、7歳になるまでユダヤ人としてのアイデンティティーを知らされずに成長した。彼女は、アリア人の証明書を入手した母と2歳のときに見知らぬ土地に移り住み、ときどき訪ねてくる父親を「おじさん」と呼んで育った。両親とグレーバーの3人は、強制収容所に送られることなく終戦を迎えた。家族と一緒に暮らすようになると、10代だったグレーバーに父親は戦争中の話を聞かせたが、怖くて部屋から出たい、父の話を二度と聞きたくないと、よく思ったという。1991年に父親が死ぬまで、戦時の話は続いた。ホロコーストの時代に幼児だったグレーバーに、窓ガラスを打ち抜く銃弾、炸裂する爆弾、家のドアの外にライフルを手にして立つ兵隊、飛行機の轟音といった幼い日の記憶が残っており、行進する兵隊達の夢を見、人ごみや地下鉄の駅でパニック発作に襲われ、乗馬靴と制服を見るとぞっとするという。あまりに幸せだと感じると、自分はこの喜びに値せず、結果として何かひどいことが起きるのではと恐ろしくなり、また、子供の頃の栄養状態や疾病が何かわからない影響を及ぼすのではないかという思いが、年をとってからつきまどっているという。この幸せや喜びについての不安感は、エプスタイン(1979)が行ったホロコースト生存者の子供達の調査でも記録されている。グレーバーは、これらの恐怖が消えることはないと思い、また、自らの不安の多くを意識せずに子供達に渡したであろうし、子供達は自分の子供達にその不安を渡していくであろう、と洞察している。

グレーバーは、幼くて何も覚えていなくて幸運だったと何度も繰り返し聞かされて育ち、自分をホロコーストの生き残りだと考えることもなかったが、成長するにつれ、理解できない、ある恐怖や夢についての説明をみつけれなくなったのだという。数多のホロコースト回想録が既にある上に自分の回想録を出版する必要があるのか思い巡らした上で、「Amazing Journey - Metamorphosis of a Hidden Child」という本を2010年に上梓した。その中で、これはホロコーストの回顧録ではなく、子供や孫や子孫達に残しておきたい遺産であり、彼らが消滅してしまったポーランドのユダヤ人の世界を後世に伝えるのにこの本が役立つことを希望すると共に、この本が、教育者、心理学者、社会学者に、異常にストレスが高い時代に育った子供の心理や問題についての見識を与えるよう望むと記している。

著書の副題に「メタモルフォーシス」とあるように、ヨーロッパでは引っ込み思案の少女だったグレーバーは、アメリカに移住し、高齢に達してから、ユダヤ系のメディアや団体でホロコーストの体験を人々に語る仕事をしている。

5. ト라우マの開示と心身の健康

ホロコーストの時代には幼くて何も覚えていないのが幸運だったと言われて成長したグレーバーは、トラウマ体験の記憶はあったが、高齢に達するまで、ホロコーストの体験を公の場で語ることはしなかった。ペネベイカー (1995) は、長年にわたり心身に影響を及ぼし続ける否定的な出来事の開示を対象とした研究を行っており、トラウマに直面し告白することが長期的な心身の健康を促進し、開示しないでおく抑圧が心身の健康を損なうことを、実験室実験により明らかにした。出来事を誰かに開示しないという行為は、その出来事を経験したこと自体よりも有害となることがあると述べている。コワルスキとリアリー (2001) は、自己開示研究を概観し、身体的健康と心理的健康、意味と洞察、個人的関係の発展、感情の制御などについてまとめている。筆記でも、口頭でも、自らの体験を言葉にすると洞察を得ることができ、逆に、ある情報を意図して隠しているという意識をもつと、その内容を以前より否定的なものともみすようになると考察している。上記の研究から、ホロコーストのトラウマを語ることは心身の健康を促進し、トラウマを開示しないでおこうとすることは健康を損なう上に、トラウマがより否定的な記憶になると推察できる。

グレーバーは、当時の栄養状態や病気が良くない影響を及ぼすのではないかという不安を高齢に至ってかかえていた。ホロコーストで栄養や衛生の状態が悪く予防的な医療を受けられない劣悪な環境での生活を強いられた場合、病気になる危険性が高まるのではという仮説のもと、ポーランドからイスラエルに移住した55,220人を対象としたサギ・シュワルツらの調査 (2013) では、予想に反し、10歳から15歳でホロコーストを経験した者も、16歳から20歳でホロコーストを経験した者も、ホロコーストを経験しなかった者より死亡リスクが少ないという結果が出た。この説明として、心の傷をもたらす経験で人生のより大きな意義を見出し人間的な成長を遂げる「外傷後成長 (post-traumatic growth)」という現象の可能性を挙げ、加えて、残酷な状況を生き延びた人々への社会的・情緒的、医療的な支援の重要性を指摘している。この研究では、調査対象者がトラウマを進んで開示してきたか、開示しないよう抑圧してきたかは問われていないが、ペネベイカーやワルスキとリアリーの研究を鑑みると、関連要因としてトラウマの開示を加えることは有意義ではないだろうか。

6. 首尾一貫感覚 (Sense of Coherence) と語り

疾病はいかに作られるかというメカニズムを明らかにする疾病生成論とは異なり、いかに健康が維持・回復・増進されるかという観点から健康要因とメカニズムについて示す健康生成論でホロコースト生存者を対象とした研究に、アントノフスキー (2001) による首尾一貫感覚 (Sense of Coherence) の研究がある。アントノフスキーは、首尾一貫感覚を、「第1に、自分の内外で生じる環境刺激は、秩序づけられた、予測と説明が可能なものであるという確信、第2に、その刺激がもたらす要求に対応するための資源はいつでも得られるという確信、第3に、そうした要求は挑戦であり、心身を投入しかかわるに値するという確信から成る」と定義している。彼は、イスラエルでの予備的研究で、トラウマとなる体験をした51名を対象に、ほとんど構造化されていない深層面接を行った。51名の出身地はイスラエルを含む18カ国で、全員がユダヤ人であり、強制収容所留置を経験した者8名を含む。この予備的研究でのインタビュー記録の抜粋が著書に紹介されている。ホロコースト生存者が語った記録には、首尾一貫感覚が強い者と弱い者が共に見られ、それぞれの首尾一貫感覚の違いが語りに現れている。

アントノフスキーは、首尾一貫感覚の強い人はストレスをより楽しいもの、矛盾がより少ないもの、危険がより少ないものと評価する傾向があると提案している。また、脅かすものと評価されたストレスは、首尾一貫感覚の強い人には悲しみ、恐れ、痛み、怒り、心配という感情を引き起こし、弱い人には不安、激怒、絶望、自暴自棄といった感情を引き起こすだろうと述べている。ホロコースト生存者が同じような経験を語る際も、それぞれの首尾一貫感覚の違いで、表現も異なり、また、開示が心身の健康に及ぼす影響も異なるのではないだろうか。

7. まとめ

本稿では、ホロコーストの生存者がトラウマの体験を語ることについて、その制度的背景、子供時代にホロコーストを異なる状況で生きた2つのケース、そして、トラウマの開示と長期的な健康への影響について概観した。バーゲンソールとグレーバーは、共に、自らの経験と自分たちが受け継いだヨーロッパ・ユダヤ人社会の記憶を後世に渡して残す義務感を語ったが、これは、本稿の冒頭で紹介した千葉の考察と重なる。トラウマ体験が及ぼす影響と関連する要因の研究から、興味深い結果が出ているが、生存者たちが高齢に達した今、従来の学問の壁を越えて彼らの経験を多面的に研究し、後の世に益する成果を残すことが急務である。

参考文献

- Buergethal, T. (2009). *A Lucky Child*. Little, Brown and Company.
- Epstein, H. (1979). *Children of the Holocaust*. G.P. Putnam's Sons.
- Graber, F. (2010). *Amazing Journey – Metamorphosis of a Hidden Child*. La Vergne, TX.
- Pennebaker, J.W. (1985). Traumatic experience and psychosomatic damage: Exploring the roles of behavioral inhibition, obsession, and confiding. *Canadian Psychology*, 26, 82-95.
- Sagi-Schwartz, A., Bakermans-Kranenburg, M., Linn, S., Van Ijzendoorn, M. (2013). Against All Odds: Genocidal Trauma Is Associated with Longer Life-Expectancy of the Survivors. *PLoS One*, July 24, 2013.
<http://www.plosone.org/article/infor%3Adoi%2F10.1371%2Fjournal.pone.0069179>
- The Conference on Jewish Materials Claims Against Germany. “Claims Conference Reaches \$1 Billion Agreement with German Government for Survivor Homecare”.
<http://www.claimscon.org/2013/05/negotiations/> May 28, 2013
- Wellenkamp, J. (1995). Cultural similarities and differences regarding emotional disclosure: Some examples from Indonesia and the Pacific. In Pennebaker, J. W. (Ed), (1995). *Emotion, Disclosure, & Health*. 293-311. American Psychological Association.
- アントノフスキー, A. (2001) 山崎喜比古, 吉井清子監修『健康の謎を解く — ストレス対処と健康保持のメカニズム』有信堂
- コワルスキ, R. M. & リアリー, M. R. 安藤清志・丹野義彦訳『臨床社会心理学の進歩 — 実りあるインターフェイスをめざして—』北大路書房
- 千葉美千子 (2008) ホロコースト研究における犠牲者の「追悼される権利」の前背化について: 「記憶の戦い」をめぐる議論を中心に 国際広報メディア・観光学ジャーナル 6, 135-153
- バーゲンソール, T. 2013年9月11日 公益財団法人国際文化会館における特別講演『幸運な子〜ホロコーストの記憶が未来に投げかけるもの』
- ヒルバーク, R. (1997) 望田幸男・原田一美・井上茂子訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』柏書房
- ベーレンバウム, M. (1996) 芝健介監修, 石川順子・高橋宏訳『ホロコースト全史』創元社

A Study of Comprehensive Understanding of Disclosure of Traumatic Experiences by Holocaust Survivors

KOMATSU Yumi

This article explores studies related to the disclosure of the traumatic experiences of Holocaust survivors such as the system of indemnity by the German government, Pennebaker's researches (1985) on disclosure of traumatic experiences and psychosomatic damage, a research on genocidal trauma and life-expectancy by Sagi-Schwartz, etc. (2013), and Antonovsky's Sense of Coherence (2001) and suggests further development of the Holocaust studies.

Memoirs of two Holocaust child survivors, Thomas Burgenthal and Felicia Graber, are introduced.